

「近東後期新石器時代の装飾土器を探る」

第2回ワークショップ

小高 敬寛

Neolithic Near Eastern Pottery in Context: The Second Workshop on Investigating Decorated Ceramics from the Late Neolithic Near East

Takahiro ODAKA

キーワード：専門家ワークショップ、国際学術交流、後期新石器時代、土器

Key-words: specialist workshop, international academic collaboration, the Late Neolithic, pottery

『西アジア考古学』14号にて報告したように、2012年1月、チェコ共和国ブルノおよびレイヴィスで専門家ワークショップ「描かれる器・描く人—近東後期新石器時代における装飾土器を探る— (Painting Pots — Painting People: Investigating Decorated Ceramics from the Late Neolithic Near East)」が開催された(小高 2013)。ここで報ずるのは、その続編として、2015年10月14日から17日にかけての4日間、スペイン王国バルセロナおよびアンブリアスにて行われたワークショップである。第1回のワークショップの席上で再会が約されてから早3年半余りもの年月が経過し、その間の西アジア考古学をめぐる情勢変化は周知の通りである。しばらく音沙汰がなかったこともあり、誠に勝手ながら筆者はワークショップの継続を憂慮していたのだが、幸い杞憂に終わったというわけだ。

今回の組織委員会 (Organizing Committee) は、現地バルセロナ自治大学の A. ゴメス (Gómez) と M. モリスト (Molist) の両氏に加え、独マルティン・ルター大学ハレ・ヴィッテンベルクの J. ベッカー (Becker) 氏で構成された。また、今後の継続的かつ定期的なワークショップ開催を見込んでのことか、新しく学術委員会 (Scientific Committee) が設置された。こちらには、前回のワークショップでオーガナイザーを務めたチェコ・マサリク大学の I. マテイチウツォヴァ (Matejiucová)、バルセロナ自治大学の W. クルエルス (Cruells)、オランダ・ライデン大学の O. ニウウェンハウゼ (Nieuwenhuys) の三氏とともに、ロシア科学アカデミーの Sh. アミロフ (Amirov)、仏ブレーズ・パスカル大学の C. ブレニケ (Breniquet)、米イェール大学の F. ホール (Hole) の各氏が名を連ねた。

前回のワークショップは装飾土器、特に彩文土器の研究に焦点が当てられたが、今回は「コンテキストにおける近東新石器時代の土器 (Neolithic Near Eastern Pottery in Context)」というテーマが掲げられた。実質的には、装飾土器に限ることなく、近東後期新石器時代の土器研究全般に対象範囲を広げた形であり、ウェブ上に掲載された告知の文面 (<http://blogs.uab.cat/potteryworkshop2/themes/>) にも、「もっとも広い意味で近東先史時代の土器を研究する専門家が一堂に会することを目的とする」とある。一応、「人びとが用いた土器の原材料と技術 (What raw materials and ceramic technologies did people employ?)」「包括的比較研究のためのツール (Existing tools for a comprehensive comparison)」「ネットワークとアイデンティティの研究に対する製作技術研究の応用 (How can we use manufacture techniques to explore networks and identities?)」「土器を利用した交差年代と層位学的シーケンスの有効性 (How useful is crossing chronology and archaeological stratigraphic sequences using pots?)」といった個別の主題も用意されたものの、それ以上の具体的な説明はなく、「これらに直接は関係なくてもテーマに適合するのであれば、発表を歓迎する」とされた。ずいぶん雑駁な企画ではないかと感じる読者諸賢もおられるかもしれないが、筆者としてはこうした組織委員会の姿勢を支持したい。前回のワークショップが企画された経緯は拙稿に記した通りであり(小高 2013: 89)、専門性の高い議論の場を創出するという所期の目的は維持されるべきだろう。しかし、研究発表が煌びやかな彩文土器で有名なハラフ土器を対象とする内容に偏ってしまう傾向があり、実際に前回のワークショップではそうであった。これは、「装

飾土器」の語が冠されたワークショップである以上、自然な流れともいえる。だが、シリア北東部やイラク北部を中核とするハラフ土器の分布圏の大半で、現地調査が困難になってしまった昨今の情勢を鑑みれば、当面、新しい資料に恵まれないことは確実であり、先々は議論の停滞をも覚悟せねばならない。一方、装飾土器だけが近東後期新石器時代における土器研究の対象となるわけではないし、特にハラフ土器分布圏以外の地域では、必ずしも装飾土器が主流というわけでもない。今後、議論を活性化させ、ワークショップの持続的な発展を図るためには、対象範囲の拡張を避けるべきではなかろう。今回のように、「後期新石器時代」あるいは「先史時代」の「土器」研究を対象とするという括りでも、専門的な議論を突き詰めるのに問題があるとは思えない。そもそも、筆者自身の調査研究フィールドがハラフ土器の中核地というわけではないという、実に個人的な都合もあるのだが。

ともあれ、組織委員会・学術委員会のご尽力によって、第2回のワークショップが無事開催に漕ぎ着けたのは喜ばしい限りであり、前回に続いて今回も参加させていただいたことに対して深謝申し上げたい。

10月13日夜、バルセロナ＝エル・プラット空港に降り

立った筆者は、翌14日、東の間の市街散策を楽しんだのち、昼過ぎに集合場所であるカタルーニャ考古学博物館 (Museu d'Arqueologia de Catalunya) へと向かった (図1)。カタルーニャ考古学博物館はカタルーニャ州に6つの館を持っており、バルセロナでは美術館・博物館の集まるモンジュイクの丘の北側に建てられている。東京でいえば上野公園の一角といったような観といえようか。

初日はここで組織委員会の三氏とバルセロナ・カタルーニャ考古学博物館館長による開会挨拶、および3本の基調講演が行われた。基調講演者としてまず登壇したのはクルエルス氏であり、シリア北部からトルコ南東部にかけて分布する最古の土器について、主にテル・ハルラ (Tell Halula) 遺跡とアカルチャイ・テペ (Akarçay Tepe) 遺跡の事例を用いながら概観した。次の講演者 R. オズバル (Özbal) 氏は、トルコ北西部のバルジュン・ホユック (Barçın Höyük) 遺跡で得られた前7千年紀中葉から末にかけての資料を多角的に分析し、食料の種類や調理方法の変化と土器との関係性を考察した。最後の講演者はホール氏で、創造 (creation) と革新 (innovation) が起こる文化的・地理的コンテキストを論じ、前7千年紀前半におけるそれらの推移について検討を加えた。



図1 バルセロナ・カタルーニャ考古学博物館

その後、参加者一同は貸し切りバスに乗ってアンブリアスへと移動した。バルセロナから北に走ること2時間余り、イベリア半島東海岸に所在するこの町は、夏季にはバカンス客で賑わうリゾート地らしい。バルセロナを東京に例えるならば、伊豆半島の東海岸、熱海あたりとでもいえよう。ただ、ハイ・シーズンの賑わいも想像できないわけではなかったが、秋の深まりとともにすっかり落ち着きを取り戻したところだったのだろうか。石畳の路地と磯に波打つ潮騒が印象的で、時間がゆっくりと流れているようにも感じられた。この日、到着したのは夜の9時過ぎ。少し遅い夕食になってしまったが、初日ということもあってか参加者どうしの話が弾み、日付が変わるころようやく解散と相成った。都会の喧騒から離れた郊外で一同が会し、文字通り寝食をともにしながら、のべつまくなしに議論の華を咲かせるといった、まるで合宿のようなスタイルは前回同様。このワークショップのスタンダードになりそうである。

そして翌朝、地中海から昇る壮麗な朝日を眺めてから、研究発表会場となったアンブリアスのカタルーニャ考古学博物館に向かう。この館はギリシア・ローマ時代の遺跡の只中に建てられており、遺跡そのものも発掘調査を継続し

つつ遺跡公園として展示に供されている(図2)。3日目(10月16日)には学芸員の案内で遺跡見学を行なったが、大勢の子どもたちや観光客が訪れており、日ごろ閑散としている遺跡公園を見慣れているせいも、少々驚きもした。また、毎年スペイン各地から選りすぐりの学生が集められ、フィールド実習を行っているらしい。今回のワークショップではその折に利用される宿舎を解放していただき、参加者の多くが寝泊まりした。

研究発表は10月15日と16日の2日間にわたって行われ、計21本の口頭発表(うち2本はキャンセル)と4本のポスター発表が用意された。詳しいプログラムは表1をご参照いただきたい。実際の時間経過は多少異なっていたかもしれないが、大きな変更はなかったように記憶している。公式に名を連ねた発表者は、発表をキャンセルした2名を除いて総勢31名であり、前回の29名から微増した。その在住国の内訳をみると、最多は開催国スペインの8名であり、これに続くのがフランスとドイツで各4名、以下オランダとチェコが各3名、アメリカ、トルコ、ロシアが各2名、そして日本が1名となる(実際には出席しなかった共同発表者を含む)。

口頭発表は、告知時に提示された主題に沿った4部構成



図2 アンブリアス・カタルーニャ考古学博物館

表1 ワークショップのプログラム

Wednesday, 14 Oct. 2015 (Archaeological Museum of Catalonia-Barcelona)		Poster Session	
Part I. Welcome and opening session, <i>Initial lectures about the Pottery Neolithic in Upper Mesopotamia: past and present issues</i>		18:15	Core Time - Anna HANZELKOVA and Maximilian WILDING, <i>Assessment of the Function of Strainers/Sieves Based on their Distribution in the Khabur Basin Area.</i> - Adonis WARDEH, Anna GÓMEZ and Miquel MOLIST, <i>Pottery design: Manufacture and technical traditions at Tell Halula during VII-VI millennium cal BC.</i> - Lonneke GRIMBERGEN, <i>Animals in Halaf Ceramic Art.</i> - Silvia CALVO, Anna GÓMEZ, Josep Miquel FAURA and Miquel MOLIST, <i>Technological approach to pottery manufacture in Pre-Halaf at Tell Halula (Syria).</i>
16:00	Address of Welcome	19:30	Dinner (Pizzeria-Restraunt "L'Esculapi")
16:15	Walter CRUELLES, <i>The emergence of the first pottery productions in Near East.</i>	<hr/>	
17:00	Rana ÖZBAL, <i>Pots for Cooking: A Developmental Overview.</i>	Friday, 16 Oct. 2015 (Archaeological Museum of Catalonia-Empúries)	
17:15	Coffee Break	Part IV. Manufacture techniques, networks and identities	
18:15	Frank HOLE, <i>The Creative Centuries (6000-5000 BC): Variability and Innovation in Neolithic Ceramics.</i>	09:15	Christophe MOULHÉRAT, Catherine BRENIQUET and Béatrice ROBERT, <i>A new method for studying pottery? Exploring the 3D scanner imaging.</i>
19:00	Transfer by bus to Empúries (ca. 2 hours)	09:45	Eva GABRIELI, <i>At the periphery of the oikoumene: the Halaf and Ubaid 'bichrome ware' tradition in the Levant.</i>
21:00	Dinner in Empúries (Pizzeria-Restraunt "L'Esculapi")	10:15	Mücella ERDALKIRAN, <i>Painted Halaf pottery on Tigris valley and its cultural interaction.</i>
<hr/>		10:45	Coffee Break
Thursday, 15 Oct. 2015 (Archaeological Museum of Catalonia-Empúries)		11:15	Guided Visit to the Greek and Roman City of Empúries
Part II. Existing tools for comprehensive comparisons		13:00	Lunch Time
09:15	Shahmardan AMIROV, <i>Morphology of Halafian Painted Pottery from Yarim Tepe 2, and Process of Ubaidian Acculturation.</i>	14:00	Anna GÓMEZ, Xavier CLOP and Miquel MOLIST, <i>Red ware: characterizing a pottery production at Tell Halula at mid-sixth millennium cal BC.</i>
09:45	Takahiro ODAKA, <i>Early pottery with horizontal applied bands from Tell el-Kerkh, Northwestern Syria.</i>	14:30	Catherine BRENIQUET and Béatrice ROBERT, <i>Why pots eat their mother? Some considerations on the near eastern Neolithic anthropomorphic pottery.</i>
10:15	Adrià BREU, Anna GÓMEZ, Carl HERON, Josep Miquel FAURA and Miquel MOLIST, <i>Investigation into the lipid preservation of pottery samples from Tell Halula (Syria) using acidic extraction and GC-MS.</i>	15:00	Rana ÖZBAL, <i>Negotiating Painted designs on Pottery: The case of Sixth Millennium BCE Tell Kurdu (Turkey).</i>
10:45	Coffee Break	16:00	Coffee Break
11:15	Olivier NIEUWENHUYSE, <i>In the Halaf Mountains. Reassessing the Halaf Ceramic Tradition of the Shahrizor, Iraqi Kurdistan.</i>	<hr/>	
11:45	Hannah PLUG, <i>Pots in burials: the case of Tell Sabi Abyad.</i>	Part V. Ceramic technology and raw materials	
12:15	Jörg BECKER, Kirsten DRÜPPEL and Markus HELFERT, <i>Local Matters: Pottery Production at Tell Halaf and Tell Tawila.</i>	16:30	Stanislava AKIMOVA, Yves GALLET and Shahmardan AMIROV, <i>New archeointensity data from Yarim Tepe II: How archeomagnetism can help synchronize Halafian sequences.</i>
12:45	Lunch Time	17:00	Yukiko TONOIKE, <i>Preliminary Results of Technical Analyses of Late Neolithic Ceramics from the Khabur Basin Survey Project.</i>
<hr/>		17:30	Alison MEAKES, <i>Pots and People: the use of analytical techniques to understand ceramic production within Iranian Neolithic society. (Cancelled)</i>
Part III. How crossing chronology and archaeological stratigraphic sequences using pots		18:00	Coffee Break
14:15	Anna GÓMEZ and Walter CRUELLES, <i>Time and technological transfer in Proto-Halaf and Halaf sequences at Chagar Bazar.</i>	<hr/>	
14:45	Claudia BEUGER, <i>Prehistoric Pottery from Tell Nader (Erbil) and Ashur (Qal'at Sherqat).</i>	Part VI. Concluding Discussion	
15:15	Sona KROLLOVA, <i>Yale Khabur Basin Survey Project: Analysis of the Halaf Pottery. (Cancelled)</i>	18:30	Final Discussion
15:45	Coffee Break	20:00	Dinner (Restaunt "Mesón del Conde")
16:15	Inna MATEICIUCOVÁ and Maximilian WILDING, <i>A Pottery Sequence from the Late Neolithic Site Tell Arbid Abyad in the Upper Khabur Region (Syria).</i>	<hr/>	
16:45	José Miquel FAURA and Miquel MOLIST, <i>VII millennium pottery sequence at Tell Halula: New lights focused on stratigraphical and chronological aspects.</i>	Saturday, 17 Oct. 2015	
17:15	Frank HOLE, <i>Diversity in the Neolithic ceramics of Southwestern Iran.</i>	10:30	Departure from Empúries to Barcelona
17:45	Coffee Break	<hr/>	

となっていたが、ここではそれぞれの発表内容について、改めて筆者なりに分類してみたい。

まず、前回のワークショップに比べて際立っていたのが、理化学的分析や新しい計測技術を用いた、いわゆる学際的な研究成果の発表である。A. ブレウ (Breu) 氏ら、ベッカー氏ら、C. ムレラ (Mouliherat) 氏ら、S. アキモ

ヴァ (Akimova) 氏ら、外池由起子氏の発表がこれに該当する。なかでも筆者の興味を惹いたのはベッカー氏らの発表で、蛍光 X 線分析と岩石学的・鉱物学的分析の結果から、ハブール川流域の諸遺跡で出土したハラフ土器のなかには搬入土器がほとんどないという、1970年代に示された説とは逆の結論が示された。

土器の特定の属性に注目した発表も比較的多かった。筆者（小高敬寛）の発表は、テル・エル＝ケルク（Tell el-Kerkh）遺跡の出土資料を用いて土器に付けられた突帯を分析したものだし、E. ガブリエリ（Gabrieli）氏の発表では、レヴァント地方の二色彩文土器に焦点が当てられた。ゴメス氏ら、ブレニケ氏とロバート氏の発表でも、それぞれ特徴的な土器を対象を絞って考察がなされた。加えて、ポスター発表の半数もこの類に分類されるだろう。

既知の資料に対する編年的再検討は、アミロフ氏、ゴメス氏とクルエルス氏、マテイチウツォヴァ氏と M. ワイルディング（Wilding）氏、J. M. ファウラ（Faura）氏とモリスト氏の発表などで行われた。たとえば、アミロフ氏は、イラク北部に所在するヤリム・テペ（Yarim Tepe）2 遺跡から出土した土器の型式学的な再検討から、ハラフ土器から北方ウバイド土器への通時の変化を改めて追いかけた。ゴメス氏とクルエルス氏の場合は、テル・チャガル・バザル（Tell Chagar Bazar）遺跡における、前6千年紀を通じた土器製作技術の変移から、固有の伝統の把握を試みた内容だった。

一方、新規の、あるいはあまり知られていない資料については、M. エルダルクラン（Erdalkıran）氏がティグリス川上流ウルス・ダム水没地域表採のハラフ土器を、C. ボイガー（Beuger）氏がイラク北部テル・ナデル（Tell Nader）遺跡とアッシュル（Ashur）遺跡の先史時代土器を、それぞれ報告した。

ニウウェンハウゼ氏の発表も、イラク・クルディスタン地域の新資料を紹介した内容だが、同時に土器の型式分布について理論的な洞察を示したものであった。理論的側面を強調した他の発表には、オズバル氏によるアムーク平原のテル・クルドゥ（Tell Kurdu）遺跡出土土器の文様構成に関する考察があげられる。また、ホール氏はイラン西部における土器の地域的多様性について論じ、基調講演で示された理論的枠組みがより具体的に調査事例と照らし合わされた。

以上、ごく簡単なが発表内容をまとめてみた。全体を通じて目立ったのが、シリアの遺跡で得られた既報告資料の再検討・再分析が主流を占めたことである。これには口頭発表の半数近い10本（うち1本はキャンセル）が当て

はまり、ポスター発表にいたっては4本すべてが該当した。加えて、現在シリアと同様に政情不安を抱える、イラク北部の既報告資料が3本の発表で主題となっていた。フィールドワーカーが圧倒的多数を占める考古学者たちの集いにおいて、現地調査のほぼ停止した地域に話題の過半が集中したという事実は、深刻に受けとめざるをえないだろう。これは、組織委員会が幅広いテーマを掲げたにもかかわらず、ハラフ土器研究に偏る傾向は変わらなかったということでもある。このワークショップの発案者でもある前回のオーガナイザー三氏は、いずれもシリア北部のハラフ土器研究を中心に活躍してきた研究者であり、参加の呼びかけは彼らの人脈に沿って行われてきたように思う。それゆえ、テーマの幅を広げても効果が薄かったのかもしれない。いずれにせよ、先行きの不安が如実に表された格好だ。

3日目の最後に行われた総合討論では、この問題が大きく扱われた。参加者たちは、やはりワークショップの発展的継続のために対象範囲の拡張が不可欠との認識で一致し、その具体的方策も議論された。その成果は、某所を候補に準備を進めることで決まった次回のワークショップにて実を結んでくれるだろう。

4日目（10月17日）は参加者一同、再び貸し切りバスに乗り込んで、アンプリアスを発ちバルセロナに向かった。往路は夜の闇中であつたので、海を眺めながらの旅を期待したのだが、あいにく高速道路は海岸線から少々離れているところに通されていた。それでも、カタルーニャの田園風景は堪能させていただいたので、睡魔と闘った甲斐はあつた。そして昼過ぎ、バルセロナ市街中心部のカタルーニャ広場にて解散。今回のワークショップは幕を閉じた。

なお、本ワークショップへの参加および研究発表にあたっては、科学研究費補助金（課題番号 24101004, 26870644）の助成を受けた。

参考文献

小高敬寛 2013「西アジア後期新石器時代における土器研究の新動向—専門家ワークショップ「描かれる器・描く人」に参加して—」『西アジア考古学』14号 89-94頁。

小高 敬寛
東京大学総合研究博物館
Takahiro ODAKA
The University Museum, The University of Tokyo